

第2章 3つの魅力

(1) 読書の魅力

読書には、だれもが何ものにもしばられることのない自由で自主的な個人的な行為であることから、他人から強制されずに自分の心を自由にできるという魅力があります。

乳児期の赤ちゃんは、保護者の肌のぬくもりを感じながら絵本を見ることにより、「ことば」と「心」を育み、本への興味を高めます。

幼児期の子どもたちは、読み聞かせやおはなしを聞くことにより、本のおもしろさに気づくとともに、本を読んでくれる人と大切な時間を過ごす心地よさを知ります。

また、本の中の世界を通じて、「ことばを聞き」、「ことばを知り」、「ことばを使う」喜びを体験します。

本との楽しい出会いを経験した子どもたちは、成長とともに本から得た知識や経験をもとにして「論理的に物事を考える」ことができるようになるとともに、感性や想像力を豊かにし、ことばの表現力を身につけることができます。



(2) 公共図書館・学校図書館の魅力

公共図書館は、すべての人があらゆる機会と場所において、自由に利用できる施設です。本と親しみ、本を楽しむことのできる環境づくりのため、本や雑誌などの情報を適宜収集し、整理・保存を行っています。

また、専門的な知識をもつ司書が、「知りたい」という気持ちをもった人々の相談にのり、その意欲や好奇心を満たしてくれる魅力的な空間です。子どもたちにとっては、安心して本との時間を楽しむことができる空間であり、大人たちにとっても、くつろぎながら子どもたちと同じ時間を共有できる空間でもあります。

一方、学校図書館においても、子どもたちは自分の学習を助けてくれる本、自分の生き方を考えるきっかけを与えてくれる本など、たくさんの本と出会うことができます。

また、自分の気に入った本を見つけ出すことを援助する学校図書館担当教職員がいる魅力的な空間でもあります。昼休みや放課後も利用できる学校図書館が、子どもたちの読書意欲を培います。

子どもたちが自発的に本を選び、楽しむ空間として公共図書館・学校図書館を積極的に利用し、生涯を通じて本に親しむ基礎をつくることができるよう、子どもにも大人にも魅力のある図書館づくりに取り組みます。



(3) 連携が生み出す読書の魅力

公共図書館では、司書やボランティアがおはなし会などに取り組むほか、市内各所で子どもの読書推進に取り組んでいるさまざまな団体や組織が、文庫活動やおはなし会などをおこなっています。これらの団体や組織が連携することにより、子どもたちが、より多く、より深く読書の喜びを感じることができるようになります。

また、子どもの読書活動の推進に取り組むすべての団体・組織が連携を密にし、人と人との交流による成果を実感しながら、より活発に活動できるよう支援します。

たとえば、おはなし会などの開催にあたって、学校の教職員と図書館の司書、ボランティアが協働することで、地域や学校や子どもたちの状況を踏まえた取り組みとしての効果を高めることができます。

なお、本計画の推進のためには、家庭、地域、行政、学校が一体となった取り組みが必要であり、関係機関、団体、書店などとの連携・協力関係をさらに強化し、具体的な方策を推進する体制を整備する必要があります。

